

プラトン『国家』第VI-VII巻における「〈善〉のアイデア」と「仮設されたのでない原理」

川島彬(東北大学)

本論文で発表者は、『国家』第VI巻503e1-第VII巻541b5で示されるプラトンの形而上学・認識論の解釈を提示する。

プラトンにおいて〈善〉のアイデアの二つの語り方が見られる。〈善〉は、あるときは(1)他のアイデアと並ぶ一つのアイデアとして(『パイドン』65d4-8, etc.)、あるときは(2)(他の?)すべてのアイデアを超越しそれらに可知性と存在を与える特別なアイデアとして語られる(『国家』「太陽の比喻」)。同じく「〈善〉」と言っても、プラトンは実は二つの異なったアイテムのことを考えている、という解釈もある。だが発表者は、二つの仕方では語られているのは同じアイテムであり、語り方の違いはその側面の違いにすぎない、と解する。そのような解釈を以下で肉付けしていく。

発表者の解釈は次のように粗描される。一般に〈X〉のアイデアは、Xであることの原因・根拠(*aitia*)である(『パイドン』100b1-101d3)。その意味で〈善〉は、善い事物を善くしている原因・根拠である。この点は(1)の側面に関わる。

〈善〉が(他の?)すべてのアイデアを超越しているというのは、すべてのアイデアを善くしている原因・根拠たる限りでの〈善〉についての、すなわち、〈善〉のアイデアの(2)の側面についての話である。およそ善いものの善さの原因・根拠たる限りにおいては、すなわち、(1)の側面について言えば、〈善〉は「実在」に属する。

さて、可知的なものの領域、すなわち、すべてのアイデアから成る全体は善いものである。これを善くしている原因・根拠はもちろん〈善〉である。そして〈善〉は、すべてのアイデアから成る全体を善くしていることによって、さらに、個々のアイデアにその存在と可知性を与えてもいる。この点は(2)の側面に関わる。

今素描として述べたことのうち、次の二点は説明を要する。(A)すべてのアイデアから成る全体は善いとされている。(B)〈善〉は、すべてのアイデアから成る全体を善くしていることによって、さらに、個々のアイデアにその存在と可知性を与えてもいるとされている。

(A)はこう説明される。(A1)プラトンにとって、ある事物が善いとは、その事物の構成要素が統合されているということである(『ピレボス』23e1-26d10, 62a2-64e4, 『ゴルギアス』503d5-505d4, 『国家』443e1-2, etc.)。ところが(A2)プラトンにとって、すべてのアイデアから成る全体は統合されている(『国家』500c3-6)、と。

(B)の説明に入る前に、「線分の比喻」の発表者による解釈を提示する。テキストで次のように言われる。数学においては、奇数・偶数、図形の諸種類などを「仮設(*hypothesis*)」として前提したうえで、そこから帰結することが考察されるが、仮設自体の説明・根拠づけはなされない。これに対し問答法は、探究の前提として立てられた「仮設」を「次々と廃棄しながら(*anairousa*, 533c9)」進む。この「上昇の道」の究極に、「仮設されたのでない原理」に到達する。それから今度は「下降の道」(511b6-c1)をたどり、「結末」に到る、と。

上の叙述を発表者は次のように解する。幾何学において、図形という、幾何学の領域を規定する概念、そして、平面図

形・立体図形といった基礎的諸概念が仮設として前提され、それらの概念を用いて考察がなされる。しかし幾何学においては、それらの諸概念を、幾何学の枠組みを超えて、存在者のより大きな連関の内に位置付けることはなされない。これが、仮設自体の説明・根拠づけはなされないと言われることの意味である。

これに対し問答法においては、あるアイデアについてそれが何であるかが問われ、この問いに答えが与えられる。ある事物の定義を与えることは、その事物をより普遍的な存在者の内に、その類の種として包摂することを含む。次に、そのより普遍的なアイデアについてその何であるかが問われ、このアイデアはさらに普遍的な類のうちに包摂され・・・というようにして進む。このように、あるアイデアを前にして、それが与える領域内に留まるのではなく、そのアイデアを諸アイデアのより大きな連関の内に位置づけていくことが、「仮設」を「次々に廃棄していく」と言われることの意味である。この「上昇」の究極に到達する、「仮設されたのでない原理」とは、すべてのアイデアから成る全体である。これが「原理(*archè*)」と呼ばれるのは、「下降の道」の考察の出発点だからである。

問答法の「下降の道」とは、すべてのアイデアから成る全体をその種へと分割し、次に、その分割の結果得られた種のおのおのをさらにその種へと分割し・・・というように進む過程である。これによって、当該の分割過程において析出されるすべてのアイデアを含む統一的かつ分節化された総観が得られる。言い換えれば、すべてのアイデアから成る体系についての完全な知が得られる。このように解するとき、「下降の道」の「結末」とは、類種体系の最下種のようなものであろう。ただし、プラトンがポルフェリオスの樹のような、全存在者の唯一の分類体系を念頭に措いていたかどうかについては判断を保留したい。以上が、「線分の比喻」についての発表者の解釈である。

ではなぜ〈善〉についての考察の中で、すべてのアイデアから成る体系が登場するのか。すべてのアイデアから成る体系は、〈善〉によって統合され善くされているものうちで格別の統合性・善さを示す。したがって、アイデアのその体系がいかにか統合されているかを学ぶことは、統合の原因・根拠である〈善〉を学ぶために格別有効だとプラトンは考えていたからであろう。

そこで(B)の主張は次のように説明される。(B1)プラトンによれば、一般に、ある体系を成す構成要素のおのおのは、それが体系内に特定の位置を占めることによってその可知性と存在とを得る。(B2)したがって、個々のアイデアは、それが、全アイデアから成る体系のうちに特定の位置を占めることによって、その可知性と存在とを得ている。(B3)〈善〉は、すべてのアイデアから成る全体を統合していることによって、個々のアイデアに、この体系的全体におけるその特定の位置を与えている。

ここでとくに説明を要するのは(B1)である。(B1)の最も有力な典拠は後期の『ピレボス』のうちにある。18b6-d2で読み書きの術の発見の過程が語られる際、字母(ないし音素)は一つの体系をなしており、個々の字母ないし音素は、それがこの体系内に特定の位置を占めることによってそのアイデンティティをもち、また学習可能となる、という考えが示されている。